

ガラテヤ書5章13-26節 「キリスト者の自由の実践」

1A 愛によって仕える 13-15

2A 聖い生活 16-26

1B 御霊による歩み 16-18

2B 対立する霊肉 19-23

1C 肉のわざ 19-21

2C 御霊の実 22-23

3B 十字架につける肉 24-26

本文

ガラテヤ人への手紙5章の後半を見ていきます。13節からです。パウロは、5章を「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。(1節)」というところから始めました。私たちは、自由を得ました。その自由を守るために、しっかりと立っていないといけません。二度と、がんじがらめの規則や、神から出たものではない説得で、がんじがらめになってはいけません。

しかし、律法主義に陥る人々の言い分があります。それは、「放縦に陥るではないか？」というものです。自由を得るためにキリスト者になったのだとすると、自分のしたいこと、願っていることを何でも行っていいのではないかといいかねます。けれども、午前礼拝でお話したように、律法は、罪の生活や肉の行いに対して、それに抗う力を持っていないということが問題なのです。事実、ガラテヤの教会は、一つの肉の行いに陥っていました。15節と26節でパウロが指摘していますが、「互いに挑み合ったり、ねたみ合ったり(26節)」していたのです。

律法主義は、外見では、とても霊的に見せませぬ。聖く見せませぬ。規則によって、その人の行っていることが目立つので、その外側の行いで聖い、と見えるのです。例えば、エホバの証人が、「目覚めよ」の冊子を掲げながら、伝道を熱心に行っていますが、正直、ちょっと自分は果たして、そこまで親身に人々に伝道の熱を注いでいるかと恥ずかしくなることもあります。

しかし、そこに落とし穴があります。それが見かけだけなのだということです。それは、自分がいかに忠実であるかを示す物差しにしかすぎず、心からあふれ出て行っていることではないからです。それでも、形は正しさを保っていくので、内と外の間で乖離が起こり、それで二重基準の中で無理やり生きていることになります。メッキが剥がれてくるのです。イスラエルの救い主、キリストを殺したのが、この方を最も熱心に求めているはずであった、ユダヤ教の指導者たちであったことを思い出してください。イエス様は、アブラハムが私たちの父だと誇っていた彼らに対して、「あなたがたの父は悪魔だ」と断罪したのです。自分たちが神の前で正しいとしていた中で、神からではな

く、悪魔から出ている殺意と憎しみを抱いていました。

律法主義は、自分の基準に合わない人を裁いて行きます。自分の行いによる義を求めているので、自分が正しいということが前提になります。実際は、正しくない自分自身の疚しさがあるので、それで強迫観念的になります、律法主義に陥ると、自分の考えに合わない相手をこき下ろします。けれども、自分自身が相手の立場に置かれたら、自分がことさらに批判していたことを、全く同じことを、多くはもっと酷い形で行っていきます。

そしてガラテヤ人たちは、神を知る以前は異教徒として生きていましたから、ギリシア・ローマ社旗にあった肉の行いは当たり前に行っていました。今、ユダヤ主義者に惑わされて、割礼を始めとするいろいろな掟に傾倒していつているのですが、過去の肉の行いを、単に別の形で行っているという矛盾に陥っていたのです。

パウロは、そこで、自由を得るためにキリスト者になったことで、その自由が何のためにあるのかを話していきます。自由でありながら、その自由をどう用いるのか？を教えていきます。

1A 愛によって仕える 13-15

¹³ 兄弟たち。あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。

パウロが、自由と言っているのは、前回の学びのように恐れからの自由です。アダムが罪を犯した時以来、人は、罪によって死に、死んで裁かれるという恐れがあります。その恐れから、キリストの死によって、その血が流されたことによって、完全に解放されました。もし自分が、自分自身を見つめて、地獄に行ってしまう、天国にはいけないと思ってしまうならば、十字架の上でキリストが血を流されたことを見つめてください。この方は、あなたのために、そこで神に呪われた方となり、罪による死、死後の裁きを受けてくださったのです。

ですから、私たちは、何かを行なったから神に罰せられるということがなくなったのです。こうした恐れから自由になっていますから、「ああ、それでは自分のやりたいことを、今度は思う存分できるではないか！」という誤った考えを持ってしまいます。けれども、それですと、新たな奴隷状態に陥ります。パウロが、コリント第一でそのことを話していました。「6:12b」すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。」すべてのことは許されているけれども、それによって支配されてしまうということです。

ここで人が、何をもって自由なのか？を考えることがとても大切です。それは、「神のかたちに造られていて、神に似せて生きている」ことが最も自由だということです。神がご自分の意志と主権で、

何からも妨げられることなく、ことごとくご自分の願われていることを行われています。神に似た者になっているということが、自由な姿です。神は人に、すべてのご自身が造られたものを支配せよ、と命じられました。神の支配にることによって、すべてものが自分に任せられ、そして神のみこころによってすべてのことを行うところに、自由があります。神のものになっているところに、自由が与えられているのです。自分自身が神と一つになっていること、交わっているところに、神のかたちとしての自由があります。そのことをパウロが、罪の奴隷と神の奴隷の対比で説明しています。「ロマ 6:16 あなたがたは知らないのですか。あなたがたが自分自身を奴隷として献げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。」

イエス様が最も自由な方です。主は、父なる神と一つになっておられ、この方の命じられることを行なっておられました。しかし、それは、主ご自身が父なる神から愛されていたからに他なりません。「ヨハ 5:19-20a まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行動します。20a それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。」愛は人を自由にします。従うということが、恐れではなく、全く自分の意志で行う力を愛は与えるのです。したがって、神に愛され、キリストの愛を受けることによって、人は初めて自由になり、そこで自分の意志で、神に従い、仕える力を持つのです。

主は、父なる神に愛され、この方に従われました。そして、人となられて、私たちの間に住まわれました。天にも地にも一切の権威が与えられている主は、私たちを愛して、私たちに仕えられました。最後の晩餐を弟子たちと持たれる前に、イエス様は、弟子たちを「極みまで愛された」とあります(ヨハネ 13:1 引照)。そこで行われたのは、弟子たちの足を洗われたことです。神の身分であられて、何でもすることのできる自由を持っておられる方が、その愛のゆえに、人となって仕える人の姿を取られて、十字架の死に至るまでそうされました。主は神の愛によって、それでここまで仕える自由をお持ちだったのです。その主が、今度は、「わたしが、このように足を洗っているのだから、あなたがたも互いに仕えなさい。」と命じられたのです。主に愛されていることを知っている私たちが、今度はそこで得ている自由を、互いに愛する機会とするのです。

私たちが、このように教会として集められています。私たちは、義務や強制、いやいやながらではなく、主の愛によって、この人たちを愛し、そして仕えたいという願いを与えておられます。その愛を十分に働かせるのです。そしてその愛は、仕えるというところに現れます。愛が言葉だけではなく、行いと真実をもって愛しなさいと、ヨハネは第一の手紙で話しました。自由を、自分自身のことを求めるための機会ではなく、与えられた愛を、互いに仕えるための用いるのです。

¹⁴ 律法全体は、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という一つのことばで全うされるの

です。

イエス様は、律法の中で最も大切なものは何かと尋ねられた時に、主なる神は一人であり、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛しなさいという戒めを挙げられました。そして次に、隣人を自分自身のように愛しなさいと言われました。

愛があれば、そこで律法の要求していることを行っていることになります。パウロが、ロマ 13 章で次のように話しました。「13:8-10 だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことは別です。他の人を愛する者は、律法の要求を満たしているのです。9「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない」という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」ということばに要約されるからです。10 愛は隣人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです。」愛があれば、そうした律法の要求を既に満たしています。

¹⁵ 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの間で滅ぼされてしまいます。

先に話しましたように、これが、彼らの間にあった問題でした。律法主義にある弊害でした。自分自身を正しくしていこうとしています。けれども、正しいのは神のみです。神のみが義なる方であるのに、何か自分で行うことに義を求める時に、自分を正しいとしていくのです。しかも、それを神に仕えているという名目で、それを主張していきます。これは、キリストのからだにとって敵です。キリストのからだは、各器官がいたわるところです。そこには、神の義、キリストの義のみがあります。つまり、すべてが恵みなのです。恵みによって人が立たせられており、恵みによって賜物が与えられ、そしてそれぞれが異なります。足があり、手があり、口があり、耳があります。ここに、自分の義を入れ込むならば、一気に、体の機能には存在しない、異質な物質が入り込み、全体のバランスを壊し、体を蝕むのです。

互いに噛みつき合ったり、食い合ったりしているというのは、攻撃的な動物の「共食い」を思い出させます。初めは同じ敵に向かって闘っていると思われる動物も、仲間であるはずなのに、同じ籠に入れたら、共食いを始めます。誰が本物の敵であるかを忘れてしまうのです。けれども、それを私たちの肉は行ってしまうのです。誰が敵であるかを分かっていないのです。私たちが絶えず、自分の味方を捜して徒党を組み、その壁の中に留まろうとしてしまったら、どうなのでしょう？それが、キリストのからだの中で起こるのは、あまりにも悲しいです。

2A 聖い生活 16-26

このようにして、キリスト者に与えられた自由は、愛によって互いに仕えるために用いるのだとい

うことを見ました。次にパウロは、聖い生活をするために、その自由を用いることについて話しています。律法自体は聖なるもの、正しいもの、良いものですが、むしろ罪深さが明らかにされることを私たちはずっと見てきましたが、主は、信仰によって私たちに御霊を与えてくださいました。この神ご自身の霊が私たちの内に住んでくださることによって、肉の弱さでできなくなっていることを、神が私たちの内のできるようにしてくださっています。

1B 御霊による歩み 16-18

¹⁶ 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。

パウロは、私は言います、と言って、彼自身が経験したことを伝えるようにして語り始めます。律法を守り行おうとして、結局、キリスト者を迫害するようなどてつもない罪を彼は犯していました。律法によっては、肉の欲望に対して何ら、効力を発揮しないことは、彼自身が身に沁みて分かっています。しかし彼は、恵みの福音を知りました。そして、御霊の力を知ったのです。「御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。」ということです。

信仰によって、神が私たちにくださったのは、ご自身の聖霊です。賜物として、聖霊を受けることを、ペテロは、五旬節の時に、聖霊が弟子たちに降臨した時に、そこに集まって来たユダヤ人に語りました。これまでも、パウロは御霊が、信じる者たちにいろいろな働きをしてくださることを教えていました。その初めに行われたことが、天地を造られた神を、「アバ、父」と呼ぶことのできるような、神の子どもになったという確信です。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と呼びます。」恐怖に陥れる、奴隷の霊ではなく、子とする霊です。父に愛されている霊です。

イエス様は、その御霊との関係を、ご自身が引き渡される直前の夜、弟子たちに多くを語られました。ヨハネ 13 章以降の、イエス様の愛を尽くして語ってくださった、最後のことばです。もうひとりの助け主の約束を与えられました。この方によって、イエス様が代わりに父に願うのではなく、彼らそのまま父に願い、御子イエスの名によって願うことができるようになるのだ、と教えておられました。「ヨハ 16:26-27 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うものではありません。27 父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからです。」

そして、主は、ご自身が命じられたことを、聖霊が彼らに思い起こさせ、またすべての真理に導いてくださることも約束されています。だから、規則のようにしてみことばを守るのではなく、必要な時に、御霊が思い起こさせ、そして、真理に導いてくださいます。また、ご自身のことを聖霊が証ししてくださることも教えられました。つまり、聖霊に満たされればそれだけ、イエスご自身が自分の

内におられること、共におられることをはっきりと知ることができるのです。手に取るように、主がおられることに確信を持つことができるのです。

パウロは、この方の内に歩みなさい、と勧めます。歩むというのは、まず、聖霊が内に住んでおられることを知ることです。次に、この方がなされることに耳を傾けているということです。心を開いていることです。そして、その語られること、導かれることに、そのままついていくことであります。このことは、一定の法則があるわけではありません。信仰によって歩んでいく中で、聖霊のなされることを体得します。

このような導きの中で生きている時には、みなさんはすっかり、肉の欲望のことを忘れていましょう！肉の欲望がなくなった、ということではありません。そうではなく、自分がその欲望に囚われなくなるということです。もちろん、そうした欲はいつもあり、それが顔を出してきます。けれども、主に目を向けるならば、御霊が働いて下さり、自由にされていることを知ります。そして、その優しい導きに従うなら、自分はいつの間にか、栄光から栄光へと、主の似姿に変えられているのです。

¹⁷ 肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。

パウロは、肉をよくすることはできないことを、ここで話しています。肉がいくら良いことを望もうとしても、必ず御霊に逆らっています。御霊が望むことを、肉が成し遂げようとしても、決してできません。必ず逆らうのです。ロマ書では、同じことをこう表現しています。「8:7-8 なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。8 肉のうちにある者は神を喜ばせることができません。」私たちは、どうしても肉を改良しようとしません。それは決してできないのです。どうすればよいのか、改良ではなく、十字架につけることです。これは後で、24 節で出てきます。

¹⁸ 御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。

自分で肉と戦うのではなく、御霊に対して心を開くことです。導かれるということです。導かれることによって、肉の行いを殺すことができます。

その時に、律法ではできなくなっていることが、実現しています。その導きは、父なる神の愛によって、またキリストの愛によって導かれています。この方を信じて、ちょうど弟子たちが、イエス様がそばにいて、助けを受けていたように、私たちも、聖霊を通してイエス様の助けを受け、自分たちにはできないことを、主がしてくださいます。ここにおいて、律法の支配は受けていません。すでに、愛によって動かされているので、結果的に律法は守り行っているのですが、愛が律法をまとめ

ているものなので、律法を守り行ってそれを成し遂げようとする必要がなくなったのです。

これがすばらしい、御霊の働きです。エゼキエルも、このことを預言していました。「エゼ 36:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」この、エゼキエルの預言に基づいて、イエス様はニコデモに、御霊によって新しく生まれることをお語りになっていました。(ヨハネ 3:3-8)

2B 対立する霊肉 19-23

1C 肉のわざ 19-21

¹⁹肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、²⁰偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、²¹ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。

パウロが、「肉のわざは明らかです」と言っているように、あまりにも明らかです。ガラテヤの人たちにも、誰が見ても、明かなのですが、ここで敢えて取り上げています。同じような、肉のわざの列挙を、パウロは、コリント人への第一の手紙、エペソ人への手紙、またコロサイ人への手紙でもしています。これは、その時代、ギリシア神話やその文化があり、ローマ社会に生きている彼らには、これらの行いは当たり前がありました。ローマ帝国はあれほど長期に、広範囲に続きましたが、徐々に、内側から衰えていったと言われてはいますが、その一つが人々、ここに列挙されていた貪りであったとも言われています。パウロは、ローマ人への手紙では、「今では恥ずかしく思っていることです。」と言っています(6:21)。

けれども、古今東西、これらのわざはありますね。初めの性的逸脱、淫らな行い、汚れ、好色がありますが、言うまでもなく、日本社会でもあまりにも明らかです。教会としては、若い女の子が、好きな、未信者の男の子と付き合うようになったら、まず親も、また牧師や先輩のクリスチャンも、注意しなければいけないのは、「やるなよ！」であります。あまりにも直接的な表現ですが、しかし、必要な言葉です。そして、ポルノの問題は教会の中でも大きな問題です。そして、偶像礼拝や魔術は、霊的な逸脱ですね。伝統的なしきたりもありますが、占いやスピリチュアル系のものは、ありふれています。その次に出てくるものはちょっと飛んで、最後の二つ、泥酔と遊興ですが、これもありふれていますね。酔っぱらうと、やってはいけないことをやってしまいます。遊興も、そこで淫らな行いや、そしりなど、普段ならやってもいけないし、言ってもいけないことができます。

そして、今、飛ばしました、「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」であります。これらが、ガラテヤ人が行っている肉のわざとして、パウロが指摘していることです。世においては、敵意は当たり前です。争い、つまり競争も、中傷も、怒り散らすことも、自分の立場を守るた

めに、人々を自分に引き寄せようとする党派心も、そして分裂や、自分の仲間を造る分派も、当たり前です。そして、妬みをもって何かをしていくことも当たり前です。

しかし、教会の中で、これが頻繁に起こっています。ここが大問題なんですね。私たちが、ポルノ映像を見てしまった。嘘をついてしまった。お酒に酔いしれてしまった、とかいうのなら、羞恥心と罪責感に悩まされると思います。けれども、教会の中で自分の意見が正しいのだとして、仲間の悪口を言ったり、SNS 上で意見の違う人の人格を攻撃したり、本当に酷いです。怖いのは、これらのことが、他の肉のわざとは異なって、羞恥心や罪悪感がなく、むしろ神のためにやっている、義憤にかられてやっているのだ、というところでやっていることです。

つい一昨日も、同性愛の問題について、二つの団体が互いに攻撃しているのをネットで見ました。同性愛行為は罪であるとする保守的な立場と、同性愛行為は罪ではないとするリベラルな立場の新聞社が、ネット上で攻撃的に、また人格否定の形で応酬をしていました。ここで、もはや、同性愛行為が罪か、そうでないかの問題ではなく、かみつき合っている、食い合っている、肉のわざになっているのです。かなり皮肉ですね、パウロはコリント第一 5 章で、肉のわざとして、同性愛を取り上げていますが、その話題を取り上げながら、敵意や争いというまた別の肉のわざを行っているのですから。

これが律法主義の恐ろしさです。妬みにかられて、殺人の思いを抱いているのに、キリストを十字架につけた、神殺しの罪があるのだ、ということを出さないといけません。神の名によって、キリストを殺したのです。それを、私たちが最も警戒すべきこととして、イエス様は、「パリサイ派やサドカイ派のパン種を警戒しなさい」ということを言われました。いつも説教の中で繰り返し、語りませんが、「正しい、というのが、全く正しくない」のです。義は神とキリストにしかないのに、自分に義を持って来る、つまり自分が神と同等なのだとする、冒瀆の罪につながる高慢なのです。

2C 御霊の実 22-23

²²しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、²³ 柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。

午前中にお話ししましたが、肉については「わざ」であるのに対して、御霊については、「御霊のわざ」と言わないことです。なぜなら、肉については私たちが行うことではありますが、御霊については、私たちが行うことではなく、御霊が少しずつ、私たちのうちに結ばせてくださる実なのです。ここに、御霊の導きと、肉のわざとの違いがあります。御霊の導きは、行為以上に、関係です。神に愛されている、キリストに愛されているという関係です。そして神を愛し、イエスを愛するという関係です。そして、実は成長です。少しずつ変えられていくことです。どんなに急ぎたくても、できません。そこで忍耐と労苦が伴います。そして、養いや世話が大事になりますね。みなさんが、自分がどう

しても変わりたいと願っていても、なかなか変わらないことで、じれったくなることがあると思います。しかし、愛する父は、私たちが自分自身に頼らず、ご自身に頼り、聖霊に頼るように、待っておられるのです。

そして実については、パウロは敢えて、「御霊の実は愛です」と、一つだけと限定していることです。実について単数形を使っていて、複数ではないからです。「5:6 キリスト・イエスにあって大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。」と言っていましたが、愛こそが律法を満たすものです。ですから、愛が実であって、その特徴が、喜び、平安、寛容あるいは忍耐、親切、善意、誠実、柔和、自制であります。

そして、「このようなものに反対する律法はありません。」と言っています。愛することが律法のまとめであり、律法に違反しないのです。ですから、ガラテヤの人たちが律法に拘っていたのですが、御霊に導かれることによって、律法の要求しているところが実現していることを教えています。

3B 十字架につける肉 24-26

²⁴ キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。

これが先に話したことです。肉を改善することができないならば、どうすればよいのか？それは、殺すしかありません。十字架につけるのです。けれども、ここで大事なものは、パウロが、「つけた」として過去形、あるいは完了形で書いていることです。自分の肉は、イエス・キリストにつくことを決めた時点で、肉については、「情欲や欲望とともに十字架につけた」のです。これは信仰の立場です。古い人がキリストと共に十字架につけられた、と、ロマ 6 章に書いてあります。すでに、そのように神がキリストにあってしてくださいました。そのように、みなしていくということです。みなす、というのは信仰の立場です。

そして、そのようにしていく中で、御霊が働いて、導いて下さり、肉の行いを殺すことができるような力をその時にくださいます。

²⁵ 私たちは、御霊によって生きているのなら、御霊によって進もうではありませんか。

ガラテヤ 3 章の始まりで、パウロが、こう言いました。「3:2-3 これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。3 あなたがたはそんなにも愚かなのですか。御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。」彼らは、すでに御霊を受けていたのです。ところが、律法の行いによって、自分の肉をもって完成させようとしていました。けれども、御霊によって生きようになったのだから、続けて、御霊によって進んでいこうではありませんかと、勧めています。

私たちの挑戦は、いかに御霊に留まっていられるか？というところですね。一向に、自分が変わっていないように見えても、周りが変わっていないように見えても、それでも信じ続けられるか？であります。アブラハムが、子が与えられるという約束があったのに、ハガルによって子を得ようとしてしまい、かえって神の御霊の働きに妨げとなりました。結局、イシュマエルを追い出さなければいけなくなりました。今もガラテヤの人たちが、肉のわざに陥っていて、はやく、恵みと信仰のうちに、初めに戻ることができるか、ということであります。

²⁶ うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりしないようにしましょう。

彼らが、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりしているのですが、「うぬぼれ」が問題でした。彼らが初めに信じた時、パウロに対して、熱い愛を抱いていました。パウロが目を悪くしていたようなのですが、自分の目を抉り出そうとするほどに、パウロのことを尊敬し、気にしていました。ところが、ユダヤ主義者らの影響を受けて、パウロが真正な使徒ではないとして、見下げていたのです。けれども、それはパウロに対するものだけではありませんでした。互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりしていました。パウロの問題と彼らはしていましたが、いや、自分たちが御霊の導きから離れて、肉の世界に戻ってしまったからに他なりません。

そして次回、最後の章6章に入りますが、うぬぼれと対比して、柔和な心で兄弟を正していくという、教会の建て上げや修復の働きを見ていきます。御霊に導かれている人の働きです。